

# 吉井源太と明治

《7》

## 大臣面会の日

### に風邪

吉井源太の著書「日本製紙論」を開くと、大きな題辞の四文字が目飛び込んでくる。

題辞は書物の最初につける詩などで、いわば、顔になる。これを源太は土佐出身の宮内大臣、土方久元に頼んでいる。

同郷の縁とはいえ、題辞を書いてもらうには、やはり、紙業への貢献があつてこそだっただろう。

明治政府の中央にいた土方をご存じの方も多いだろうが、簡単に紹介したい。

「三百藩家臣名辞典」によると、土方は、重臣である用人格の家に生まれた。

土佐郡秦泉寺（現高知市）に住み、秦山と号した。文久三（一八六三）年には藩命で京都へ上り、三

条実美の衛士となる。

しかし、この年の八月十八日の政変で、実美ら七人の公家は京から追放され、西へ下る。土方は帰国の藩命を拒んで、実美の側を離れず国事に奔走した。その後、土佐浪士の中岡慎太郎とともに薩長同盟の仲介に尽力した。明治政府においても役職を歴任し、明治二十（一八八七）年に宮内大臣に任せられ、八年後に伯爵になる。

「日本製紙論」出版の同年（一八九八）年は、宮内大臣を辞した年になる。

寄せた題辞は「潔白光瑩」。清い白さと光沢という意味で、源太の漉いた紙と、人となりを誉めたのではないだろうか。

この題辞を頼むことを主目的として、源太は、出版する前年の十二月中旬から東京へ出掛け、翌年一月中旬まで長期滞在した。

相手は、すぐに直接面会できる人ではない。まずは、書生に依頼して、面会の承諾を得る手順を踏んだらしい。十二月二十三日に面会したことが日記に書かれている。

ところが、この日の日記の記述はこうなっている。

「甚寒 病発 朝七時宮内大臣館宅二行 土方君二面会ス 十時帰宿ス 病氣二成」（非常に寒い。発病する。朝七時に宮内大臣官邸に行く。土方氏に面会する。十時に宿へ帰る。病気になる）。病は、風邪だったようだ。

議で連日忙しかった。とうとう折悪しく土方との面会の日、病気になってしまった。

やっとかなう面会であり、キャンセルなどは不可能だったはずだ。風邪の辛さをこらえて面会に出掛けたと想像できる。

源太は、面会を終えて宿に帰ったあと、しばらく寝込むことになった。

宿へは、高知や東京の人から手紙が届いたり、見舞品を持って訪ねて来る人もおり、対応しながらの養生となった。このときに限らず、源太には、どこの滞在先へもいろいろな人が訪れ、物が届いたりした。

（京大大学院研修員、京都府在住）



土方久元が寄せた日本製紙論の題辞「潔白光瑩」

高知から出掛けた源太に、冬の東京は寒かっただろう。また滞在中は、「日本製紙論」の出版元との協

議で連日忙しかった。とうとう折悪しく土方との面会の日、病気になってしまった。